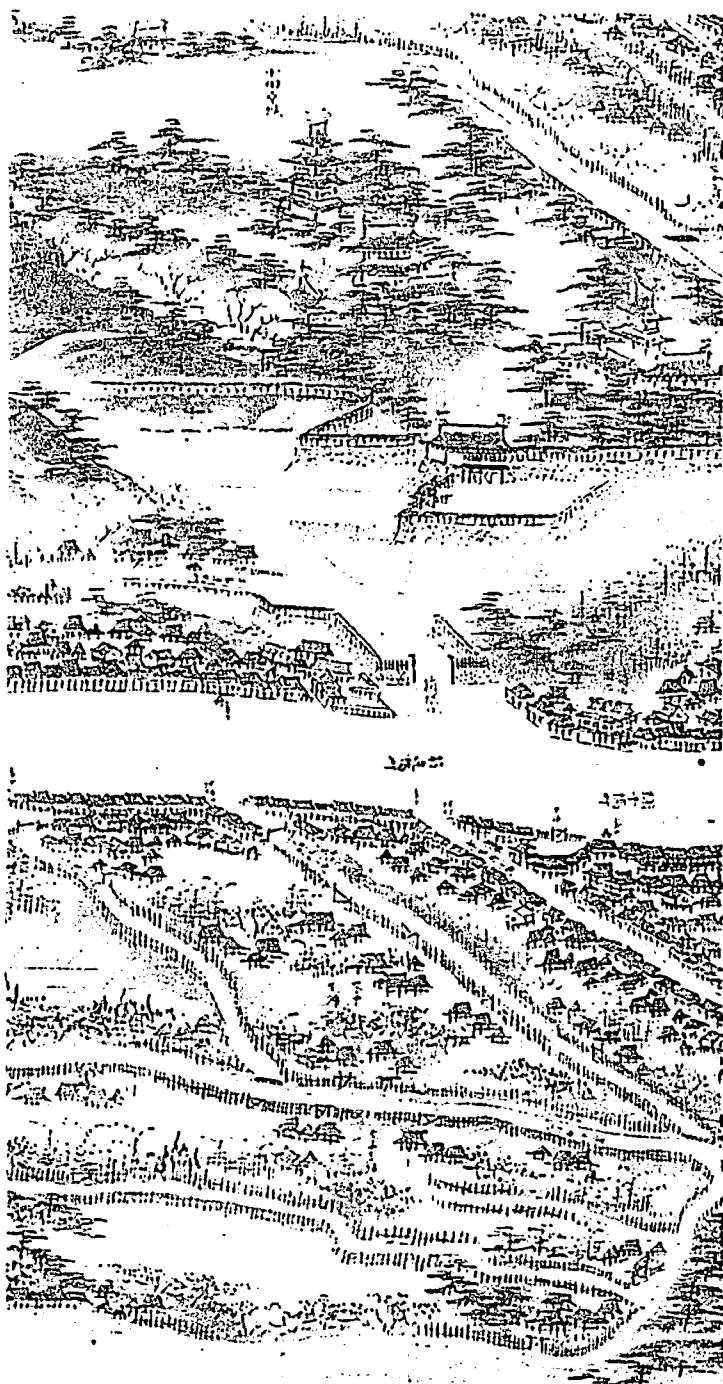


平成十五年三月三十日（日）

第三一三回史跡めぐり

城下と宿場の町 小田原を訪ねる

越谷市郷土研究会



「東海道分間延絵図」のうち小田原宿の一部

第三十三回 史跡めぐり

城下と宿場の町

小田原を訪ねる

・日 時 平成十五年三月三十日（日）

・集 合 J R 南越谷駅前 午前七時二十分

・コ ース 往路 南越谷駅 ⇒ 京浜東北線 ⇒ 東京駅 ⇒ 東海道線

⇒

南浦和駅

⇒

武藏野線

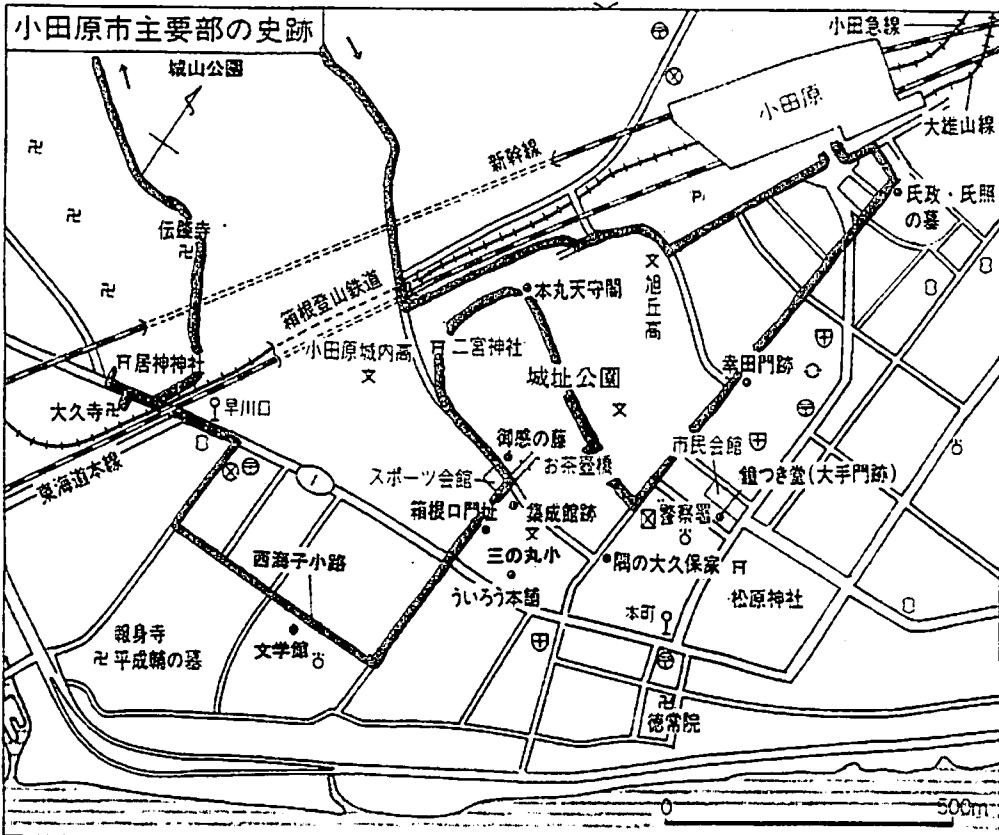
⇒

小田原駅

小田原駅：氏政・氏照の墓：小田原城趾（公園内一巡・天守閣入館）：西海子小路（文学館入館・庭で昼食）：大久寺：居神神社：伝燈寺：城山公園（小崎の大堀切）：小田原駅

- ・参加費 四、五〇〇円（交通費・資料・入館料・保険料を含む。昼食は各自持参。）
- ・案内者 理事 水上 清

★小田原の歴の名所、小田原城址公園・西海子小路・城山公園の三ヶ所を散策します。



◆小田原の概要

神奈川県の南西部にあり、湘南地方西端の行政・商業の中心地。

東海道本線・東海道新幹線・御殿場線を始め、小田急電鉄・伊豆箱根鉄道大雄山線・箱根登山鉄道などの諸線また国道一号・一三五号・二五五号の各線、小田原厚木道路・西湘バイパス・箱根新道・箱根ターンパイク・真鶴新道などが通する。

市域は箱根外輪山の東斜面と大磯丘陵西部の両山地と、おもに酒匂川が作った足柄平野、早川の河口部平地からなる。

気候は温暖・冬暖夏冷で、湘南保養地域の西端をなす。人口一九八、七三八人。

名産：伝統的な木工業・水産加工業が盛んで、小田原漆器・箱根寄木細工・木象嵌ひくせん・小木工品・小田原提灯・かまぼこ・梅干・ういろうなど有名。

◆小田原の沿革

①市内各所に古代遺跡が散在し開発の歴史は古く、鎌倉・室町の頃には既にかなりの町であつたらしい。鎌倉幕府の御家人士肥氏が代々居住したが、上杉禅秀（氏憲）の乱（一四一六・七年）

に土肥氏没落し、大森氏がこれに代わって築城した。

②明応四年（一四九五）伊豆蘿山におこつた伊勢新九郎のちの北条早雲が大森氏の小田原城を奪取し城下町の整備を行つた。これが現市街地の都市的起源とされる。以来九六年間北条氏の城下町として栄えた。

③近世には小田原藩大久保氏一一万三千石の城下町で、箱根の関所をひかえた宿場町として繁栄した。本陣・脇本陣八軒、宿屋九十軒以上を数えた。

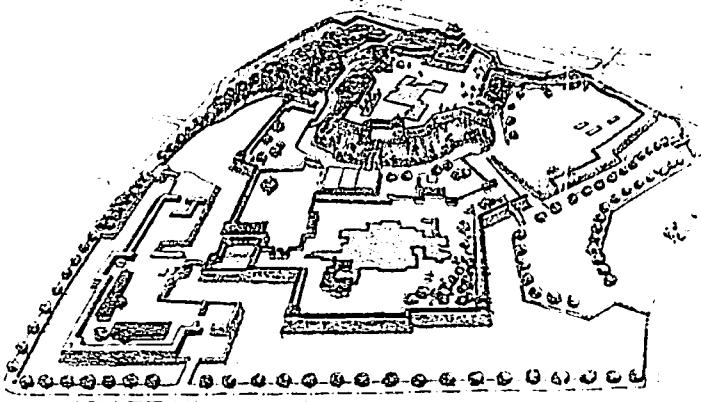
④明治に入り鉄道が開通すると、温暖で風光明媚な保養地として着目され、山県有朋・伊藤博文・北村透谷ら政治家・実業家・文化人が競つて別荘を建てた。

⑤昭和九年、丹那トンネルの完成で東海道本線が通じると、小田原は交通上重要な位置を占め、本格的な都市化が行われて県南西部の中心地・県下有数の商業都市として発展した。

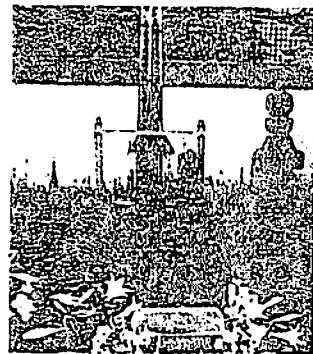
⑥近年は酒匂川流域の工業地化により食品・印刷・フィルム・繊維関係の大工場が立地している。

地名「おだわら」

「小田を張る」即ち「小さな田を開く」という意味で、古くは「おだはる」と呼ばれていたのではないかと云われている。



史跡小田原城本丸・二の丸整備基本構想



北条氏政・氏照の墓

◆ 北条氏政・氏照の墓所

氏政は北条氏四代の領主。氏照は氏政の弟で八王子城など五つの支城の城主。

天正十八年（一五九〇）豊臣秀吉の小田原攻めにより小田原城が落城すると、五代領主氏直（徳川家康の娘督姫の婿）は高野山に追放され、父氏政と氏照は城下の安斎邸にある医師田村安斎邸（現南町）で切腹させられた。

両人の遺体は当時この地にあつた北条氏の氏寺・伝心庵に埋葬された。（現中町永久寺所有）放置されていた墓所はその後稻葉氏が城主の時（一六三三・八五）北条氏追福のため整備された。大正十二年（一九二三）の関東大震災では墓所が埋没する被害を受けた。翌年地元の有志により復元された。

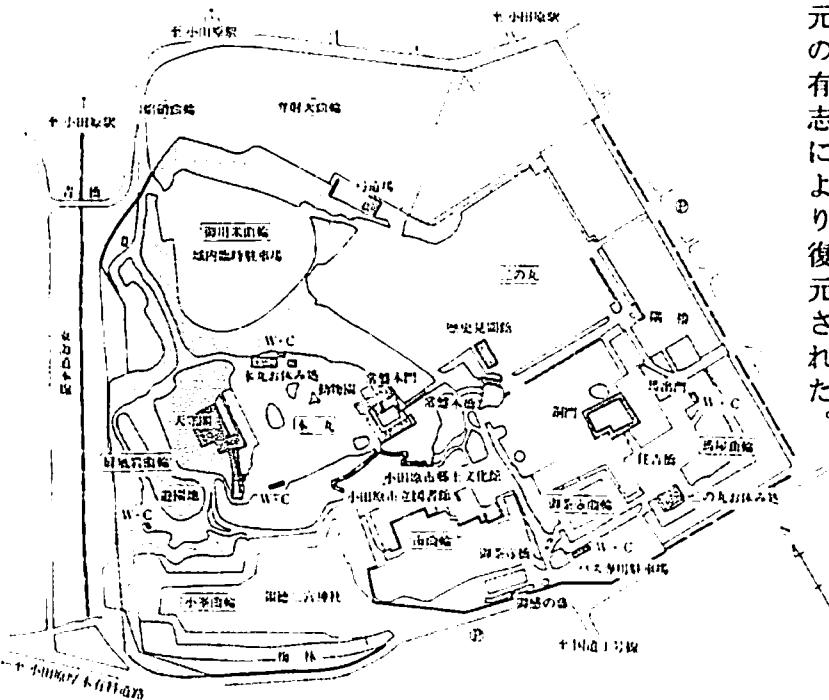
◆ 小田原城跡

（城址公園・国指定史跡）

近世、小田原大久保氏十

一万三千石の本拠となつてい
た平山城跡。本丸・二の丸・
三の丸跡の残堀、堀や石垣など二十一・七万平方メートル余りが國
の史跡に指定されている。

この史跡を保存活用するた
め、平成五年に「史跡小田原
城跡本丸・二の丸整備基本構
想」が策定され、江戸時代末
期の曲輪取りを基本にした復
元を目指している。



◎小田原城

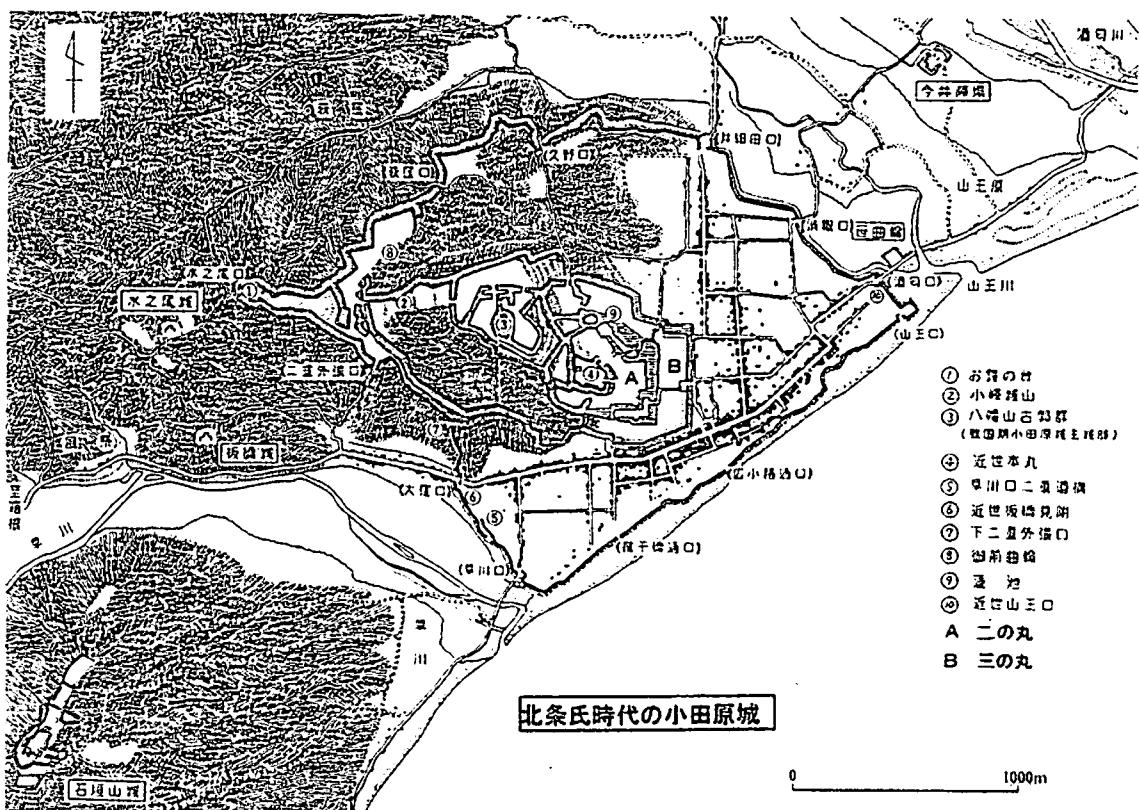
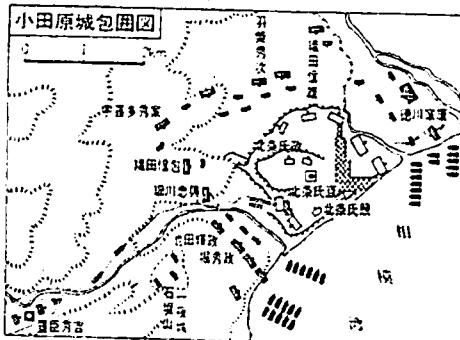
室町時代に大森氏の築いた山城が前身で、その後戦国大名小田原北条氏の居城となつてから、関東支配の中心拠点として次第に整備拡張され、豊臣氏の来攻に備えた城下町全体を囲む大外郭の出現に至つて城の規模は最大に達し、前例を見ない巨城に発展した。その周囲は一〇畳にも及んだ。土塁と空堀を主とする中世的城郭で、北条氏が秀吉の大軍を迎へ一〇〇日の籠城に耐えたのも一つにはこの大外郭の威力によるものであつた。

小田原北条氏滅亡後は徳川の譜代大名大久保氏が城主となり、江戸時代になると幕命により二の丸や三の丸などの内部破却行われ三の丸以内に縮小されたが、稻葉氏時代に行われた大規模な工事によつて近世城郭として生まれ変わつた。次いで大久保氏が再び城主となり、東海道をおさえ箱根をひかえた関東地方防御の要として幕末に至つた。

小田原城は明治三年に廃城の方針が出され、城内の主要建物は解体された。今日見る内部の石垣などの諸郭の構えは稻葉氏時代のもとのと考えられる。

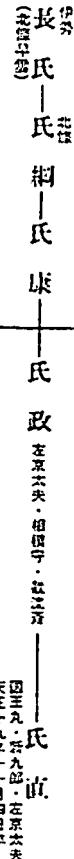
「小田原評定」

豊臣秀吉が小田原城を攻めた時、城中で和戦の評定がなかなか決まらないかったことから『いつまでも決まらない相談』を指して云う。



新九郎
（三十九歳）

箱根外輪山へと延びる舌状台地の先端部を中心に築かれた平山城で



④ 北條氏略系図

現在、幸田門口は道路や建物の下に埋もれてしまつてゐるが、その東側に繞く三の丸土塁は約一〇〇米残つており、江戸時代の面影を今に伝えてい。當時は、本丸・二の丸（現在の城址公園周辺の範囲）を包むようにお堀と土塁を巡らし三の丸としていた。

戦国時代の上杉謙信と武田信玄が小田原城を攻めた時にはこの幸田門に肉薄したと云われており、北条氏康・氏政父子は籠城策を用いてこれを避け、小田原を守り抜いた。

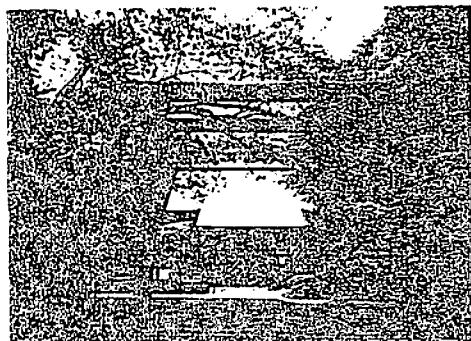
住吉橋（左）と銅門
馬屋曲輪から二の丸に通じる大手筋に設けられた二の丸の表門に当たる。櫓門、内仕切門および土堀からなる樹形門。樹門には銅板の装飾が映え、これが門名の由来となつた。平成九年の復元。

⑤ 銅門

北条氏時代の小田原城（右図参照）
早雲が大森氏の居城に入城した当初は現在の本丸の北側にある八幡山周辺の丘陵を中心には築かれていた。二代氏綱の後半生から三代氏康の頃には本丸が現在地に移り、二の丸外郭及び堀池から現在のお堀端、二宮神社にかけて豊かな水濠が完成し、謙信・信玄の攻撃を跳ね返す原動力となつた。氏康は信玄の侵攻直後の永禄年間三の丸外郭築造の大工事にかかる。これが完成すると引き続き秀吉の侵攻に備えての大外郭が築造された。完成は五代氏直の天正十八年、秀吉の小田原攻め開始直前と思われる。

本丸には三層の天守閣が建ち、郭内には城主の館や重臣達の屋敷が置かれていたといわれる。しかし城郭を石垣で構築することは希で、天守を始め他の建物も瓦葺ではなかつたようである。

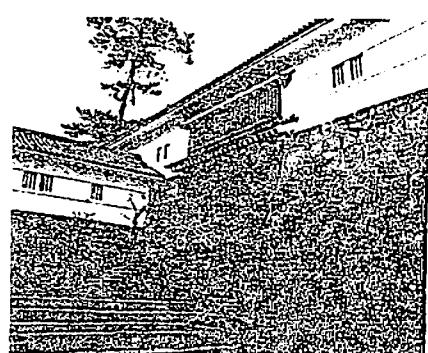
小田原城関係略年表	
応永24年	1417 大森頼春、小田原へ入部 (この頃、大森氏が小田原城築城か)
明応4年	1495 伊勢宗瑞(早雲)、大森頼春を追い小田原城を奪取する。以後2代氏綱から北条氏を名乗り、小田原を居城とする。
永禄4年	1561 長尾景虎(上杉謙信)小田原に来攻。(この頃までに本丸が現在地に移り三の丸外郭成立)
永禄12年	1569 武田信玄小田原に来攻。 (この後、三の丸外郭に着手か)
天正15年	1587 小田原城の大修理、整備工事が行われる。 (三の丸外郭完成か)
天正18年	1590 稲佐秀吉の侵攻に備え、大外郭はじめて完成。 【小田原合戦】北条氏直降伏、滅亡。 徳川家康の家臣大久保忠世が入城。
慶長19年	1614 大久保忠世改易。小田原城は破却され、三の丸以内に規模が縮小される。 (この改築では初期天守が建設される。)
元和5年	1619 阿部正次、入封。この前後は幕府番城となる。
寛永10年	1633 大地震発生、小田原城大破。 織田正勝、小田原城の近世化工事に着手。
延宝3年	1675 小田原城の近世化工事が完了する。
貞享3年	1686 大久保忠朝(忠興の子孫)、小田原入封。 以後幕末まで大久保氏が掌握。
元禄16年	1703 大地震発生、小田原城大破。天守・橹等倒壊。
宝永3年	1706 天守再建。以後櫓城解体され城内有数。
明治3年	1870 小田原城焼城。天守・橹等は元用、解体撤去。
大正12年	1923 大地震発生、石垣など破損し二の丸隅櫓倒壊。
昭和9年	1934 二の丸櫓の平滑復旧。
昭和25年	1950 城跡で小田原二之丸文化博物館開館。 地図で崩壊した天守古墳復原開始。
昭和35年	1960 天守復原質。
昭和46年	1971 善賢木門復興。
平成9年	1997 銅門復原



報徳二宮神社



小田原城天守閣



常盤木門

● 常盤木門

小田原城本丸の正門に当たり、最も大きく堅固に造られていた。周囲に多門櫓と渡り櫓を配した拵形門の構造を持ち、側にあつた巨松になぞらえてこの名が付けられたとされる。昭和四六年の復興。

● 天守閣

江戸時代に造られた模型や引き図を基に、外観を江戸末期の姿、内部を歴史資料の展示施設として昭和三五年に復興された。

三層四階の天守櫓に、多門櫓・続き櫓を付した複合式天守閣。

天守閣内部には小田原の歴史や小田原城に関する様々な資料が展示されている。

● 報徳二宮神社

小田原の生んだ江戸末期の農村復興指導者・二宮尊徳翁を祀る。明治二七年（一八九四）四月に建立。貧しい農家に育ち天災地変と戦い、これを克服し、当時の小田原城主大久保忠真に登用され、数々の業績を残した翁を、時の人々がゆかりの天守閣下の地を選んで祀った。付近には尊徳の資料を展示した報徳博物館もある。

● 箱根口門跡

樹齢一五〇年という藤棚で株は三株、天守閣の遠望に一米余りの花房が垂れ下がる様は絶景である。大正天皇がまだ東宮殿下の頃ここを訪れた折、乗馬が藤の花の下に駆け込み花を散らしたので感嘆された。これが後にかく呼ばれるようになつた由来である。

北条時代後期には大手門があり、江戸時代には箱根口御門があつた所。ここに残された土塁は御門から続く三の丸土塁の一部で、現在国の指定史跡になつてゐる。

土塁の内側にある三の丸小学校には江戸時代後期相模国最大の学校であつた小田原藩集成館があつた。名君とうたわれた藩主・大久保忠真が文政五年（一八二二）に創設した学校で、諸稽古も行われ、藩士の子弟が文武の修行に励んだ。

小田原宿

小田原宿は慶長六年（一六〇一）「伝鐵制」の制定と共に誕生した。江戸を発ち東海道を二十餘里（約81km）、品川宿から数えて九番目の宿である。関八州を統一した後北条氏の城下町として繁栄した小田原は、江戸時代になつても箱根山を控えた関東の玄関口として軍事的かつ地理的にも江戸防衛の重要な拠点であったので、幕府は有力な諸代名の居城とした。

小田原は宿場町としての機能を備えた城下町であり、町は領主の居城を中心には整備され、東海道沿いには町屋が集中し宿場町としての特有な町割りとなつていた。

小田原宿には本陣と脇本陣が各四軒ずつあり、これは五十三次のうちでは最も多く旅籠屋も軒を重ねていた。江戸後期の天保年間には百軒を超えて、町並みも土産屋、食事屋、雜貨屋、衣料屋、魚屋など、その衆種は十六種類にものぼり、生鮮食料品や日用品は豊富で、これらを生業とする商人と旅行者で城下は活気にあふれ栄えていた。荷物を宿から宿へ配送する問屋場では百人百四の人馬を常備し、緊急時に備えて三十人の人足と二十四匹の馬を常備していた。



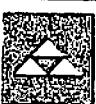
小田原提灯

小型で円筒状の提灯。折り畳むと上下の枠が組み合わされ、袂または懷中に入るので、懷提灯とも呼ばれ、江戸時代、主として旅行者が用いた。普通、發行する時には布袋に入れ、口紐の端に蠍火入れの竹筒または根付けなどを取り付け、腰に下げた。これを小田原提灯といったのは、小田原の蓋左衛門という人が作り出したからで、享保（一七一六～三六）の頃には全国的に広く用いられるようになり、土産提灯として小田原名産の一つとされた。



北条氏の家紋「三つ鱗」の由来

鎌倉北条氏の祖・時政が江ノ島の弁財天に子孫繁栄を祈った満願の夜、龍神が時政の誠意に感じ、三枚のウロコを残して海中に消えたと云うことからこれを拾つて北条氏も自ら北条氏の後裔と称し「三つ鱗」を受け継いだ。宗家は「北条鱗」、鎌形城の氏邦は「丸に三つ鱗」。



ういろう本舗（透頂香薬店）

五〇〇年の伝統を誇る日本最古の薬屋。元祖は応仁の乱後元から亡命した陳廷裕で、元朝に仕えていた頃は官名が礼部員外郎だったことから外郎を名乗り京で薬を充つた。この薬を冠に入れておくと薬の香りが透き通して匂うので、「透頂香」という名で公卿の間で好評を得た。

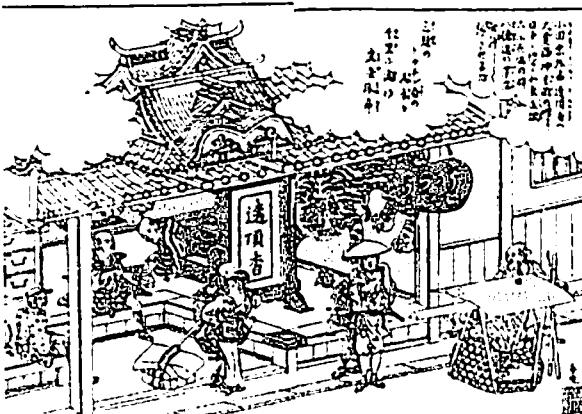
外郎家は五代定治の時北条早雲に招かれて小田原に下つた。透頂香という靈薬は十一種の薬材を用い、眩暈や気付け、咽喉や咽喉の痛みにもよく効くというので、二代氏綱はこれを重用し、定治は大永三年（一五二三）八棟造りの建物を建てて薬業に勵む。

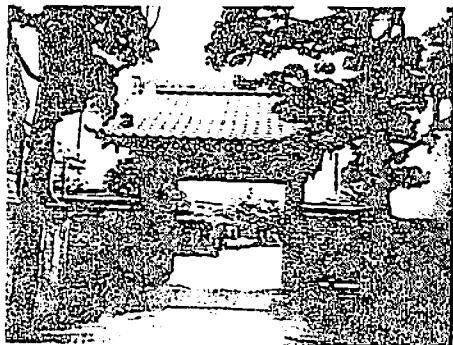
江戸時代には、二代目市川団十郎が咳と痰の病で声が出ず舞台に立てずにいたところ、「この薬で全快、感激した団十郎が歌舞伎十八番「外郎亮」を創作、

大好評をえるなどして、「外郎」（透頂香）は小田原の名物となり、東海道を旅する人々がこの八棟造りを見物しがてら道中薬として必ず買ひ求めるほど

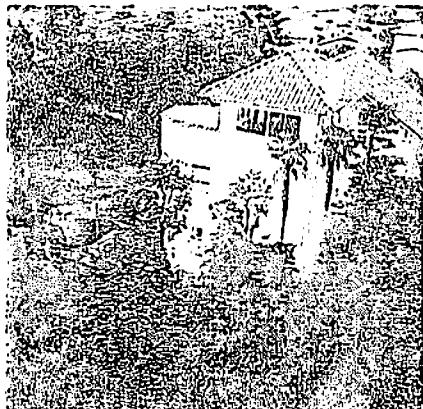
の評判になつた。

北条時代の八棟造りは関東大震災で崩壊したが、最近これが再建された。





大久寺



小田原文学館



西海子小路

江戸時代の小田原の町名・地名

表紙の「絵図」を見ると、上右から「小田原城」「箱根口」「透頂香薬店」「櫛千櫻町」「番ヤ」「本陣」「宇安斎小路」「宇狩野(殿)小路」「宇舗白小路」「宇西海(子)小路」「家中屋舗」「浜道」などの文字が見える。これらは実際に江戸時代の小田原で使われていた建物名・町名・地名であるが、明治時代以降江戸期の町名・地名は公式では使われなくなつた。しかし、今でも小田原で俗称として聞かれ、あるいはバス停留所名などに使われ、町で生き続けているものが幾つかある。

これらの江戸時代の町名・地名を無形文化財として現在・未来へと伝えていこうと、小田原市では昭和六〇年(一九八五)から各町名があつたとされるところに町名碑(一〇四基)を建てている。小田原の市街を歩いていると、あちらこちらで町名碑に出会える。ぜひ、気をとめて、町を歩いてみよう。きっと、江戸時代の城下町・宿場町小田原の雰囲気が少しは味わえてこよう。

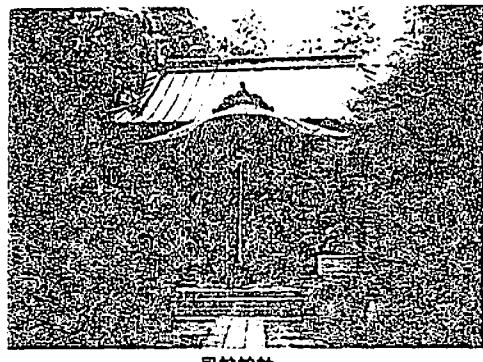
◆西海子小路と小田原文学館・白秋児童館

西海子小路は武家屋敷が集まつていた静かなな佇まいの小路である。

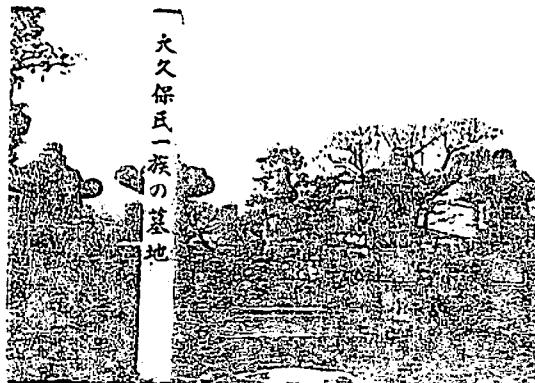
この周辺には、かつて多くの文学者が居を構え、文学活動が行われた。この小路の一端にある小田原文学館は、北村透谷、北原白秋、谷崎潤一郎など本市にゆかりの深い文学者の資料を展示している。

スペイン風様式の本館は昭和一二年に元宮内大臣田中光頸伯爵の別邸として建てられたものを利用している。また、別館の日本家屋は、白秋児童館として北原白秋の文学資料を展示している。

日蓮宗宝聚山随心院と号す。天正十八年(一五九〇)徳川家康の重臣であつた小田原初代城主大久保忠世が開基し、遠州二俣(現天竜市)から招かれた僧日英が開山した大久保氏の菩提寺である。



居神神社



大久保氏一族の墓地

● 大久保氏一族の墓地（市指定史跡）

大久保家の当主は、初期には大久寺に葬られたが、中期以降は主として江戸青山の教学院（現在は世田谷区太子堂に移転。）に葬られていた。
初代・忠世の墓石は法華五輪塔の代表的なもので損傷もなく立派なものである。
他に二代城主・大久保忠隣ほか七基の墓石が並んでいる。

◎ 居神神社

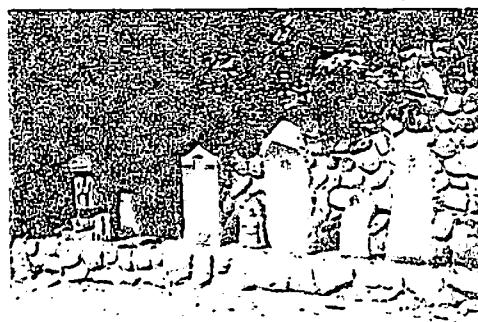
木花咲耶姫命、火之加具土神と小田原北条氏に討たれた三浦荒次郎義意の靈を祀る。

◎ 三浦氏滅亡に關わる靈承

永正十三年（一五六六）一月十一日、油壺の荒井城で早雲・氏綱の大軍に滅ぼされた三浦一族最後の主・荒次郎義意の首が飛来し、当所の松の枝に掛かり、三年間目を見開いて通行人をにらみ殺したという。そこで、市内久野總世寺の忠室和尚が「うつつとも夢とも知らぬ一眠り浮世の隙を曙のそら」と詠んで祈ると首は白骨となつて地に落ち、その際空中より「われ今より当所の守り神にならん」との声があつたので、人々は祠を建て義意の靈を慰めた。

◎ 古碑群（市指定重要文化財）

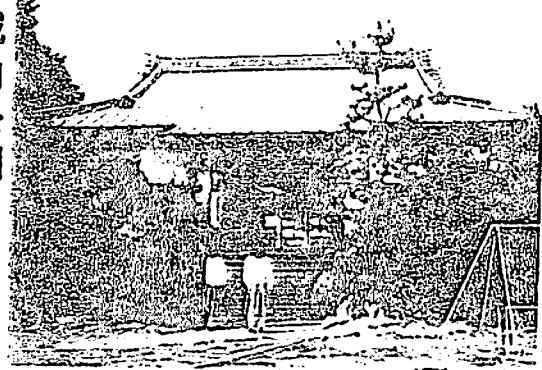
「文保元年（一三一七）」と「元享二年（一三一二）」の銘入りの板碑、五輪塔線刻碑が一基、五輪塔陽刻碑が一基、いずれも鎌倉末期の念佛供養碑である。



居神神社の古碑群

◎ 云隱寺（愛称「みみづくさん」）

浄土宗、樹高山西照院と号す関東最初の念佛道場。当寺から増上寺九世、十世に出世する和尚が出た。また、往時紫衣勅許の際この寺の添状を要した。このため「出世の寺」の別称があった。



伝 立 寺

◎ 北原白秋の「みみづくの家」跡

多くの童謡を残した詩人・北原白秋は境内のたたずまいが気に入り、「みみづくの家」を建て、大正七年（一九一八）から約八年間を過ごした。白秋はここで「あわて床屋」を初めとして多くの作品を生んだ。寺の裏には「赤い鳥」の石碑がある。



「みみづくさん」と
「赤い鳥」の石碑

◆ 城山公園

北条氏の最盛期にはこの辺りまで城郭に含まれていた。今は山の地形を生かした公園として市民の憩いの場になっている。

神奈川県の歴史散歩（下）
図説 中世城郭辞典

主な参考資料

- 城山一帯には今でも土壘、空堀などの遺構が部分的に残っているが、特にこの遺構は大きく東堀・中堀・西堀の三本の堀切からなり、「小峰の大堀切」と名付けられている。小田原城の西侧を防衛する最も重要な場所であつたと考えられる。
- 小峰の大堀切
- 世界大百科事典
家紋大全
- 相州小田原城（パンフレット）
- 小田原文学館・白秋童謡館（パンフレット）小田原文学館
- 山川出版社
新人物往来社
梧桐書院
平凡社
小田原市役所
小田原市役所

寛永 9 年から貞享 2 年(1632 ~ 1685)

江戸時代の小田原城

用いて郭を強固に再構築し、かつ各邊物姿はこの時のものである。しかし、北条氏入り口などを除き概ね保持されていたと

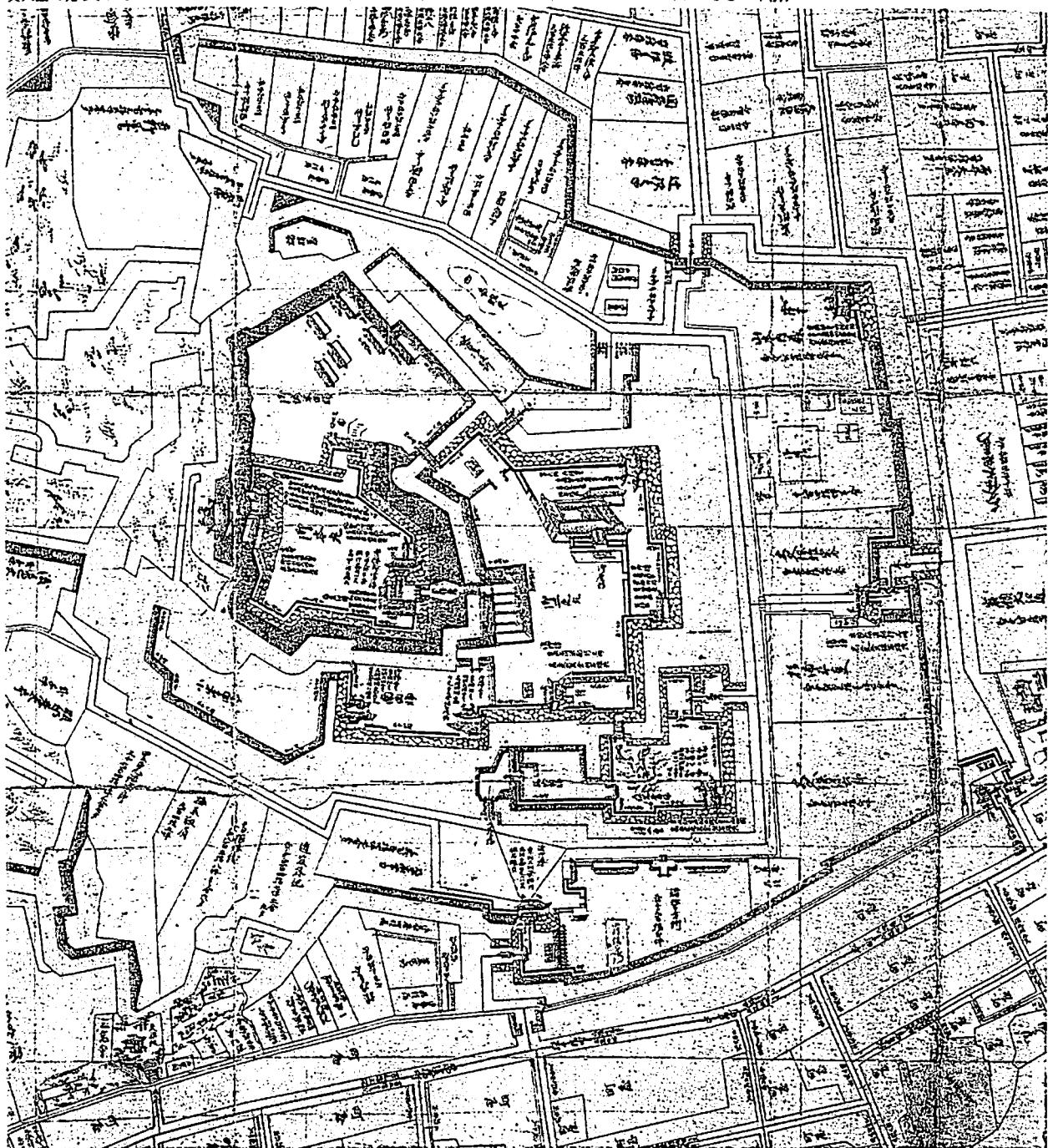
►第77図 相模國小田原城絵図（諸国城郭絵図 部分 国立公文書館内閣文庫）

諸国城郭絵図（正保絵図）に見る小田原城の内郭。天守の置かれた本丸の左手（北側）には後北条時代の旧本丸他の郭が地形に沿って形成されているのがわかる。内郭をめぐる堀は、南側が水堀であるのに対し、北側は後北条氏時代の本丸跡地を含めて全体に空堀がめぐっている。

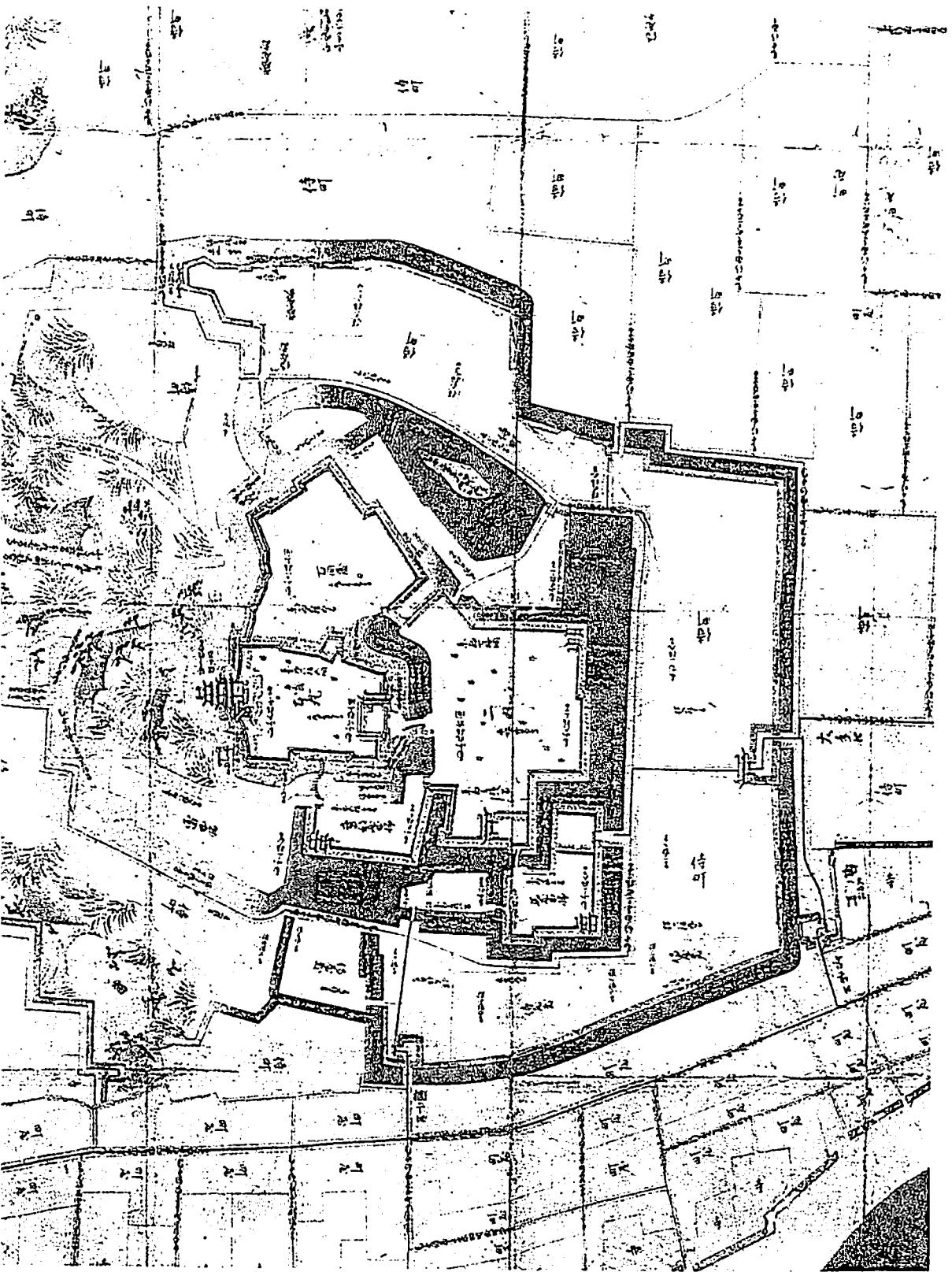
正保年間 1644 ~ 1647 年(家光の時代)

▼第78図 小田原城下絵図「文久図」(部分 小田原城天守閣)

文久図に見る小田原城の内郭。城郭の骨格は基本的に変わらない。



での稻葉氏の在城時代に城郭の大改修が行われている。この時の改造は石垣を
葺きとした近世の城が誕生した。正保の城下絵図(第 77 図)に見る小田原城の
その總構えの形態は、文久の城下絵図(第 78 図)にも見られるように城下への出
される。



歴史のまちで文学散歩



小田原文学館
白秋童謡館

- 小田原と文学
- こんなにいるゆかりの作家
- 貴重な資料がもりだくさん
- 白秋の童謡知っていますか？
- 建物や庭も必見！

小田原と文学

「海よし山よし天気よし」明治の文豪藤原綠雨は小田原を評してこう言いました。その温暖な気候ゆえか、昔からたいへん住みやすいところとされ、明治時代には伊藤博文や山県有朋など政界の重鎮たちをはじめ、多くの人々が別荘を建てるなど、保養地として、また居住地として小田原にやつてきました。その中には文学者の姿も数多く見られ、北原白秋のように家族の療養のために訪れたもの、中にうに寒さから逃れるためにきたもの、中に人は人の目から隠れるようにやつてきた文学者もいて、その数は著名な作家だけでも十数名にのぼります。そしていつしか小田原を気に入り、定住していく文学者も少なくないのです。

小田原にはまた、ここを故郷とする文学者もたくさんいます。明治のはじめに島崎藤村と共に、「文学界」を創刊した北村透谷、芥川賞作家で文化勲章を受章した尾崎一雄、また民衆詩派の中心的詩人であった福田正夫や昭和二〇年代後半「抹香町」もので一世を風靡した川崎長太郎など様々です。

このように、小田原には出身やゆかりの作家が数多くいますが、ひとつのまちに、縁故ある作家がこれほどいるのは、たいへん珍しいことなのです。ただ気候がいいからとか、自然に恵まれているからというだけではないような気がします。そのわけは、小田原をもつともと知つていただければ、わかつてもらえるかもしれません。



早川から米神にかけての海岸線

島崎
藤村
と共に、
「文学界」
を創刊した
北村透谷、

芥川賞作家で
文化勲章を受章した
尾崎一雄、

また民衆詩派の中心的詩人であつた福田正夫や昭和二〇年代後半「抹香町」もので一世を風靡した川崎長太郎など様々です。

このように、小田原には出身やゆかりの作家が数多くいますが、ひとつのまちに、縁故ある作家がこれほどいるのは、たいへん珍しいことなのです。ただ気候がいいからとか、自然に恵まれているからというだけではないような気がします。そのわけは、小田原をもつともと知つていただければ、わかつてもらえるかもしれません。

小田原にはまた、ここを故郷とする文学者もたくさんいます。明治のはじめに島崎藤村と共に、「文学界」を創刊した北村透谷、芥川賞作家で文化勲章を受章した尾崎一雄、また民衆詩派の中心的詩人であつた福田正夫や昭和二〇年代後半「抹

香町」もので一世を風靡した川崎長

太郎など様々です。

このように、小田原には出身やゆ

かりの作家が数多くいますが、ひと

つのまちに、縁故ある作家がこれほ

どいるのは、たいへん珍しいことな

のです。ただ気候がいいからとか、

自然に恵まれているからというだけ

ではないような気がします。そのわ

けは、小田原をもつともと知つて

いただければ、わかつてもらえるか

もしれません。

おもな出身の文学者と代表作

北村 透谷（きたむら・とうご）詩人 「楚囚之詩」「蓬莱曲」

尾崎 一雄（おさき・かずお）小説家 「暢氣眼鏡」「虫のいろいろ」

川崎長太郎（かわさき・ちょうたろう）小説家 「抹香町」「裸木」

福田 正夫（ふくだ・まさお）詩人 「農民の言葉」「船出の歌」

戸田 義雄（とだ・よしお）詩人 「白沙の駅」「水上を恋ふる歌」

井上 康文（いのうえ・やすぶみ）詩人 「愛する者へ」「土に祈る」

牧野 信一（まきの・しんいち）小説家 「父を売る子」「ゼーロン」

北原 武夫（きたはら・たけお）小説家 「妻」「苦白的女性論」

辻村 伊助（つじむら・いすけ）登山家 「スウキス日記」「ハイランド」



おもなゆかりの文学者と代表作

北原 白秋（きたはら・はくしゅう）詩人 「雲母集」「とんぼの眼玉」

北條 秀司（ほうじょう・ひでじ）劇作家 「王将」「建礼門院」

谷崎潤一郎（たにざき・じゅんいちろう）小説家 「細雪」「刺青」

斎藤 緑雨（さいとう・りょくう）小説家 「油地獄」「門三味線」

村井 弘齋（むらい・こうさい）小説家 「食道樂」「釣道樂」

三好 達治（みよし・たつじ）詩人 「測量船」「艸千里」

坂口 安吾（さかぐち・あんご）小説家 「真珠」「白痴」

岸田 國士（きしだ・くにお）劇作家 「牛山ホテル」「チロルの秋」

川田 順（かわだ・じゅん）歌人 「国書聖蹟歌」「東帰」



谷崎潤一郎



坂口安吾



川田順

白秋と童謡

白秋が童謡を創るきっかけとなつたのは、

大正7年、鈴木三重吉の児童雑誌「赤い鳥」に童謡の担当として参加したことでした。

小田原天神山の伝聲寺に「木菟の家」を建

てた頃のことです。

大正11年に長男隆太郎が生れると、白秋の童謡に対する思いは一層ふくらんでいつたようです。白秋は「揺籠のうた」についてこう言っています。

「私はひとりで楽しんで歌ひ、赤ん坊のお母さんにも歌はせ、揺籠をゆすり、乳母車を押し、寝床まで歌つきかせました」

愛する子どもに歌つてきかせるための作品づくりが、白秋の童謡創作の力の源にもなっていきました。

白秋は「赤い鳥」だけでなく、「大観」や作曲家の山田耕筰と共に創刊した「詩と音楽」など、他の雑誌にも作品を発表しています。また「赤い鳥」では毎号1編から2編の創作童謡を發表するだけでなく、新作童謡を募集して優れた童謡作家を世に送り出し、また各地のわらべ唄を蒐集、整理するなど、日本の童謡確立に精力的に取り組み、大きな足跡を残しました。

鈴木三重吉

なお、白秋童謡館にはこれらの資料のほか、白秋が日本で初めて本格的に翻訳した「マザーゲース」のコーナーもあります。



北原白秋



「赤い鳥」創刊号

赤い鳥、小鳥、なぜなぜ赤い。
なぜなぜ白い。
白い実をたべた。

青い鳥、小鳥、なぜなぜ青い。
青い実をたべた。

「赤い鳥小鳥」

揺籠のうたを、
カナリヤが歌ふよ

ねんねこ、ねんねこ、
ねんねこ、よ。

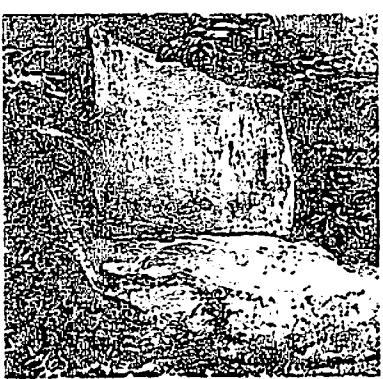
揺籠のうへに、
枇杷の実が揺れる、よ。

ねんねこ、ねんねこ、
ねんねこ、よ。

「揺籠のうた」



昭和30年 小学校音楽教科書挿絵



赤い鳥小鳥 童謡碑

小田原時代の主な童謡

年代順

りすりす小栗鼠	あわて床屋	お祭	赤い鳥小鳥
鐘が鳴ります	ちんちん千鳥	離れ小島の	揺籠のうた
かやの木山の	げんげ草	お月見	砂山
かえろかえろ	からたちの花	ベチカ	待ちぼうけ
この道	もどみたお家	あめふり	

洋と和の対照美

小田原文学館の建物は、幕末の志士で、元宮内大臣でもある田中光頭が別邸として建てたものです。

昭和12年建築の洋館(文学館)は、当時の上流階級の間で流行してい南欧風のつくりで、屋根瓦はわざわざスペインから輸入したもので。庭はいわゆる洋風庭園ですが、中央には五葉松、周囲には桜や楓を植えるなど和洋折衷の様相を呈し、四季折々の美しさを堪能できます。

また、大正13年に建てられた日本家屋(白秋童話館)は建物、庭園とともに純和風のつくりですが、ガラス障子などが用いられ大正ロマンの趣を楽しませてくれます。



文学館

田中光頭（たなか・みつあき）

幕末の天保年間に土佐藩の郷士として生まれる。土佐勤王党に加わるが、のち脱藩して中岡慎太郎の陸援隊に参加した。維新後は新政府に出仕し、明治14年に陸軍少将となる。31年宮内大臣就任後は11年間にわたり、その職にあり、宫廷政治家として大きな勢力をもつた。40年には伯爵位を授与され、42年宮内大臣を辞任し引退。晩年は各地で維新烈士の顕彰に尽力した。昭和14年死去。享年97。



白秋童話館

小田原文学館

〒250-0013
神奈川県小田原市南町二丁目3番4号
tel. 0465-22-9881

開館時間 9:00 ~ 17:00 (入館は16:30まで)
休館日 12月28日 ~ 1月4日

観覧料	個人	大人 250円	小中学生 100円
	団体	180円	70円



西海子通り

昭和に入ると、三好達治がここからほど近い早川口に居住し、それを頼つて坂口安吾もやってきました。また岸田国士や北條秀司といった劇作家の大作家も西海子に住みました。現在ではだいぶ様変わりしましたが、当時を偲ばせるたたずまいは、今でも残っています。

小田原市南町界隈は、江戸時代には武家屋敷が立ち並び、明治から昭和の初めにかけては別荘地として栄え、政治家、画家、文学者はじめ、たくさんの著名人が住んだところです。特に文学館周辺は、東西に走る西海子通りを中心にして数多くの文学者が居を構えました。明治期には斎藤緑雨、村井弦章、小杉天外、大正期には谷崎潤一郎や明治期には斎藤緑雨、村井弦章、小杉天外、大正期には谷崎潤一郎や

文学館周辺

小田原城周辺まっふ

Odawara Area Map

小田原女子短期大学
Odawara Women's Junior College

城山三丁目
Shimoyama 3-chome

競輪場
Cycle Racef.

* 厄神神社(古碑群)
Igami-jinja Shrine

JR東海道本線
Tokaido Line

至熱海 早川口
To Atami
Oshikawa口

南町四丁目
Minamicho 4-chome

早川口

木象嵌 <内田定次>
Machikado Museum

南町三丁目
Minamicho 3-chome

諸島小路

諸島二丁目
Minamicho 2-chome

小田原文学館
Odawara Literature Museum

白秋童謡館
Hakushu-doya Museum

保健福祉事務所
Public Health & Welfare C.

児童相談所
Children's Consulting Ctr.

七福神・福禄寿 <大通寺>
Dōchū-ji Temple to Fukurukyū,
of 7 Gods of Good Fortune

民法完結の地
滌浪間跡
Sorokaku Historical House

遊歩道
Walking Trail

青少年相談センター
Youth Counselling Ctr.

小田原城内高校
Odawara-jinsei High School

炎山角天神社
Yamakaku Tenjinsha-shrine

報徳博物館
Holoku Museum

市立図書館
City Library

藤棚(御恩の藤)

Wisteria Garden

スポーツ会場
Sports Hall

Sannomaru Gift Shop

藤棚観光案内所
Fujidana Tourism Information

郷土文化館
Local Culture Museum

銅門広場
Akigane-mon Gate Square

銅門
Akigane-mon Gate

水の公園
Mizunotoen Garden

北河透谷演習場
Mizunoto-en YAMURA, Toji

法務局
Ministry of Justice

裁判所
Court

箱根口門前
Sengen-guchi-mon Gate

二の丸観光案内所
Ninomaru Tourism Information

三の丸小学校
Sannomaru Elementary School

三の丸小学校前
Chuo Fire Sta.

消防署中央分署
Chuo Fire Sta.

東京電力
TEPCO

本町一丁目
Honcho 1-chome

本町
Honcho

小田原宿
なりわい交差点商店
Narai Rest House "Kadokochi"

本町三丁目
Honcho 3-chome

明治天皇宮ノ前
Site of a Hotel Where the Meiji Emperor stayed

徳常院
Tokujo-in Temple

* 御幸の浜プール

Miyukinotsuma Swimming Pool

七福神・布袋尊 <國福寺>
Enpuku-ji Temple to Margaritezaien,
of 7 Gods of Good Fortune

正恩寺の鐘楼門
Gate of Shouon-ji Temple

間中病院
Manaka Hospital

御幸の浜
Site of a Hotel Where the Meiji Emperor stayed

MOC

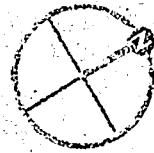
明治天皇聖蹟
Site of a Hotel Where the Meiji Emperor stayed

本町
Honcho

小田原宿
なりわい交差点商店
Narai Rest House "Kadokochi"

本町三丁目
Honcho 3-chome

明治天皇宮ノ前
Site of a Hotel Where the Meiji Emperor stayed



城山中学校入口

東海道新幹線
Tokaido Shinkansen Line

北条早雲公像

Statue of HOJO, Soun

西口
WEST

小田原駅

Odawara Sta.

東口駅前駐車場

東口 ◎ 観光案内所

Tourist Information

旭丘高校

Aoiyama High School

商工会議所

Commerce & Industry

観光協会

Tourist Association

弓道場

Archery Range

Museum

茅田口門跡

Site of Kada-guchi-mon Gate

小田原郵便局

Odawara Post Office

学園 公共職業安定所

Career Services Ctr.

市民会館

Civic Hall

小沢病院

Kizawa Hospital

郵便局前

Post Office

大手門跡(鐘楼)

Site of Ote-mon Gate

(鐘楼)

市民会館前

Civic Hall

県合同庁舎

Pref. Govt Office

公原神社

Atsubara-jinja Shrine

木町二丁目

Hikacho 2-chome

青物町

Seimokucho

国際通り

Kokusai-dori

浜町一丁目

Hamacho 1-chome

社会保険事務所

Social Insurance Office

亦
stayed

青物町

青物町

Seimokucho

陶器 <松崎屋>

Machikado Museum

北村透谷誕生の地

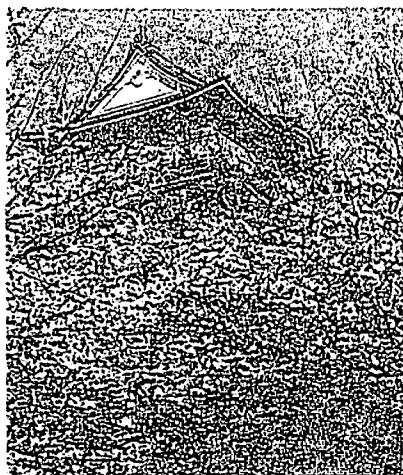
KITAMURA Tetsuo Birth place

店人町

Teinjin-chome

労働基準監督署

Labor Standards Inspection Office



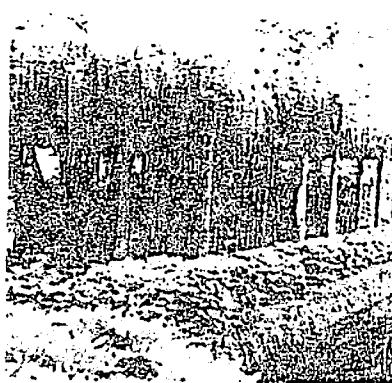
城趾公園の桜



城山公園の桜



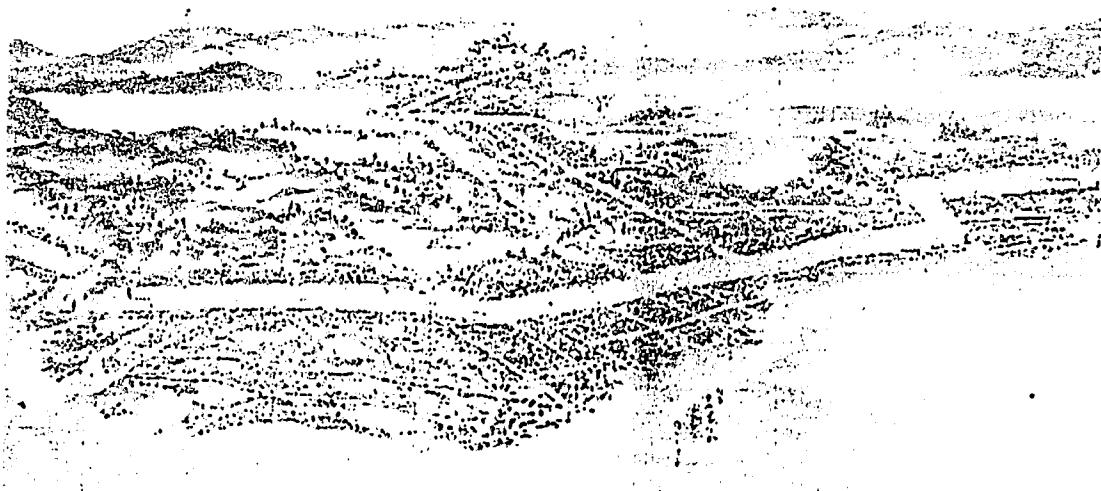
西海子小路の桜



城址公園の御感の森



葛飾北斎 小田原 外郎亮



東海道分間延絵図のうち小田原宿(東京国立博物館蔵)

「東海道分間延絵図」は、江戸幕府の道中奉行が作成したもので、享和年代(1800年頃)前後に描かれた。分間とは測量という意味。